

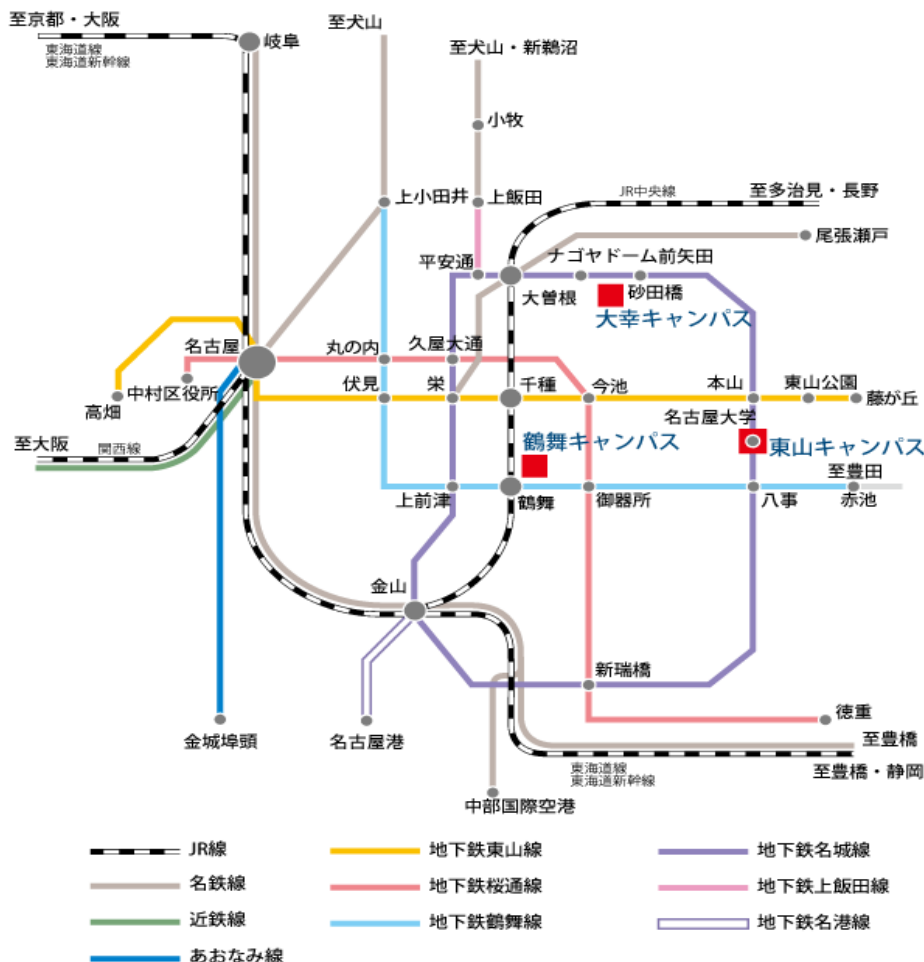
日本 18 世紀学会第 34 回全国大会  
プログラム  
報告要項

2012 年 6 月 23 日（土）、24 日（日）

名古屋大学 経済学研究科  
〒464-8601 名古屋市千種区不老町

## 第 34 回大会プログラム

<名古屋駅から名古屋大学までの経路>



\*東山キャンパスが会場です。

\*地下鉄名城線 名古屋大学駅 ①番出口すぐの建物です。

JR 名古屋駅（名鉄／近鉄名古屋駅）からの場合…地下鉄東山線藤が丘行きに乗車し、本山駅で地下鉄名城線右回りに乗り換え、名古屋大学駅下車。所要時間約 30 分(乗換含む)。

JR 金山駅・名鉄金山駅からの場合…地下鉄名城線左回りに乗車し、名古屋大学駅下車。所要時間約 25 分。

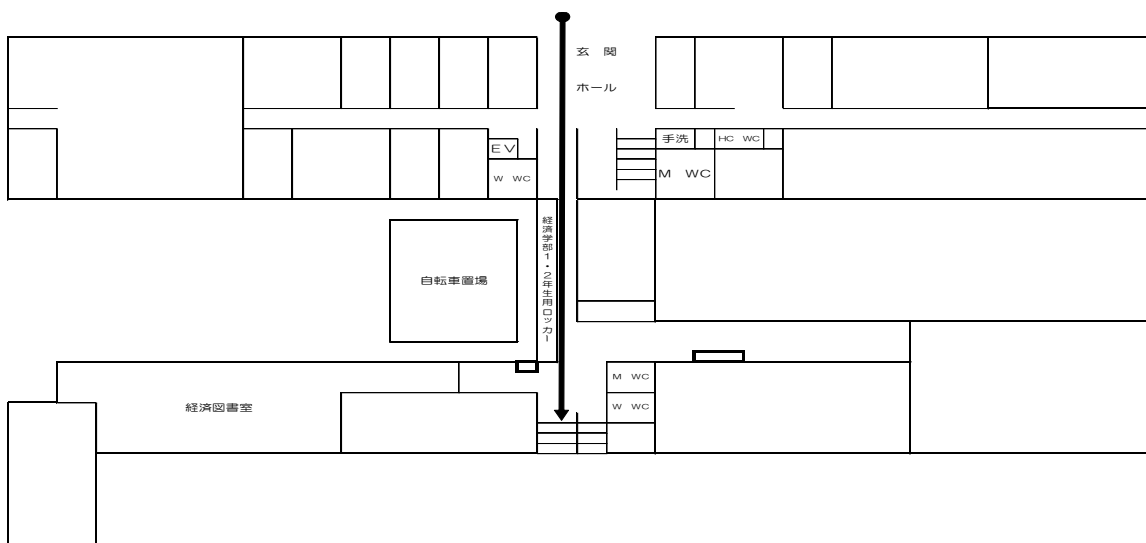
<中部国際空港からのアクセス>

中部国際空港から名鉄特急に乗車し、名古屋駅または金山駅で下車、その後地下鉄に乗り換え(上記参照)。

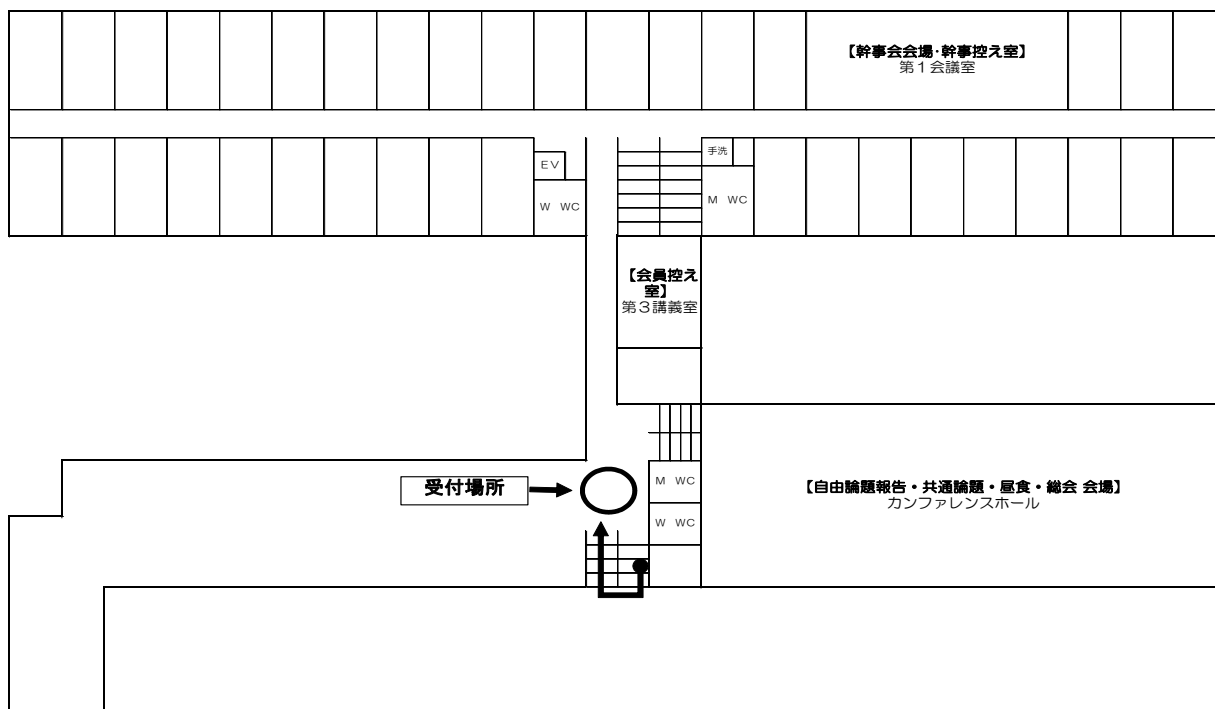
又は、空港バスにて栄または名古屋駅に出て、地下鉄に乗り換え。

<大会会場地図：名古屋大学経済学部棟>

1 階



2 階



\*会場は経済学部棟 2階となります。

当日は経済学部棟正面玄関に立看板があります。それを目印にお越しください。

## 第1日 6月23日(土)

発表会場 名古屋大学 経済学研究科 カンファレンスホール (2階)

### 9:00 受け付け開始

### 9:30-9:35 開会挨拶

自由論題報告

### 9:35-10:20 自由論題報告(1)

「金沢友緒「18世紀ロシアにおけるゲーテ受容」

金沢 友緒 (東京大学)

司会：鳥山祐介 (千葉大学)

### 10:25-11:10 自由論題報告(2)

「博物学の詩人 パーシー・ビッシュ・シェリー」

加藤 芳子 (北海道大学)

司会：大石和欣 (東京大学)

### 11:15-12:00 自由論題報告(3)

「趣味の調停者としての理想的モデル—ディドロの模倣論とその批評的意図—」

吉成 優 (東京大学)

司会：青山 昌文 (放送大学)

### 12:00-13:50 昼食(+幹事会)

昼食会場：カンファレンスホール 及び 会員控え室 (第3講義室、2階)

\* 弁当の配布開始は11:45の予定です。

12:15までに引き取られなかった弁当については会場販売いたしますので、  
ご注意ください。

### 13:50-14:50 水田文庫見学会

大会開催に際し、名古屋大学附属図書館に収蔵された「水田文庫」及び「ホップズ・コレクションII、III」「18世紀フランス自由思想家コレクション」「永井文庫」などの西洋古典籍コレクションを附属図書館展示室にて展示いたします。実際に手にとって御覧いただけます。当日は水田会員による紹介を予定しております。是非ご参加下さい。

また、その他会場に展示されていない貴重書についても、その場で閲覧申請をしてお覧いただけます。希望される方は、展示会場へ直接お越しください。図書館係員が対応いたします。

\*見学会集合場所：名古屋大学附属図書館 展示室（4階）

なお、展示室は12:30～15:30まで開室しておりますので、見学会の時間帯以外でもご自由に御覧ください。個別の貴重書室見学も同時時間帯で図書館係員が対応いたします。

#### **15:00-15:45 自由論題報告（4）**

「18世紀フランスにおける「白いモスリンのギリシア風ローブ」の表象—マリ・サレの舞台衣裳改革の試み—」

林 精子（青山学院大学）

司会：中山 智子（京都外国語大学）

#### **15:50-16:35 自由論題報告（5）**

「ドレスデン宮廷楽長時代のJ. A. ハッセ——宮廷楽長とオペラ作曲家——」

大河内 文恵（東京芸術大学音楽研究センター・大学史史料室）

司会：荒川恒子（山梨大学）

#### **16:45- コンサート会場へ出発（大型バスで会場まで移動します）**

#### **17:15- コンサート 趣旨説明及び解説者・演奏者紹介**

#### **17:30- レクチャー・コンサート：**

#### **「リスボン地震ゆかりの音楽家たち—スカラッティとモーツァルト—**

会場： 5/R Hall&Gallery（ファイブアール ホールアンドギャラリー）音楽ホール  
（名古屋市千種区今池1-3-4）、TEL：(052)734-3461

解説： 都築正道（中部大学特任教授）

演奏： 水村さおり氏

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部器楽科入学。パリ国立高等音楽院卒業。ジュネーヴ国立音楽院大学院修了。日本モーツァルトコンクール第2位、第5回国際モーツァルトコンクール ディプロマ受賞、第4回オルレアン20世紀国際ピアノコンクール第1位、併せてプーランク賞、ルーセル賞受賞。2003年、名古屋市民芸術祭賞受賞。現在、中部大学人文学部講師。

曲目： スカラッティ ソナタ K.380、K.17

モーツァルト ソナタ KV310、アンダンテ KV616

<コンサート会場地図>



**19:00-21:00 懇親会**

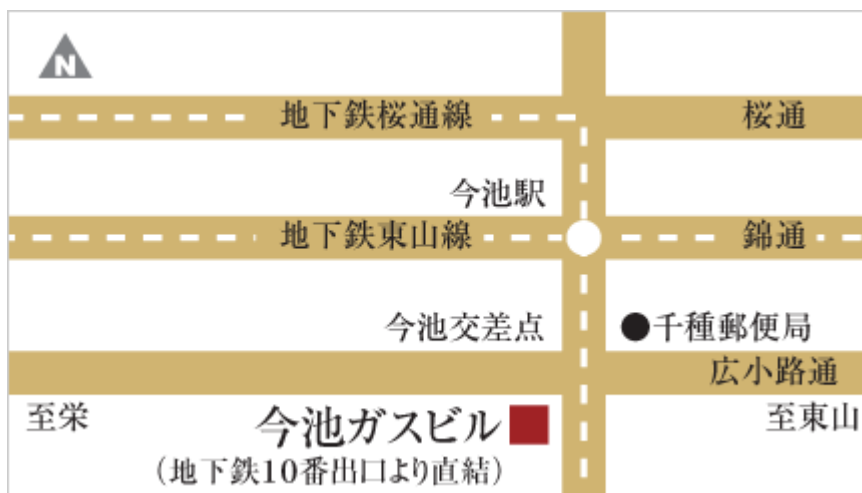
会場： 和菜 SALOON ガス燈

(名古屋市千種区今池 1-8-8 今池ガスビル 8階)、Tel : (052)732-2994

会費： 5,000 円

- \* コンサート会場から徒歩での移動となります。
- \* 冒頭で、韓国 18 世紀学会会長よりご挨拶いただきます。

<懇親会会場地図>



## 第2日 6月24日(日)

発表会場 名古屋大学 経済学研究科 カンファレンスホール (2階)

### 9:30 受け付け開始

自由論題報告

### 10:00-10:45 自由論題報告(6)

「近世・近代ドイツの聖書解釈学における「著者の意図」の契機 聖書の意味の分類法の歴史的変遷にそくして」

桑原 俊介 (東京大学)

司会: 田中均 (山口大学)

### 10:50-11:35 自由論題報告(7)

「フィジオクラットの政治理論の矛盾?—「デスポティズム」と「自由な討論」をめぐって」

安藤 祐介 (立教大学)

司会: 森村 敏巳 (一橋大学)

### 11:40-12:50 昼食および総会

昼食・総会会場: カンファレンスホール

\*弁当の配布開始は11:30の予定です。

12:00までに引き取られなかった弁当については会場販売いたしますので、  
ご注意ください。

### 共通論題 「18世紀と自然災害 —リスボン・ナポリ・日本」

コーディネーター兼総合司会 佐藤 淳二 (北海道大学)

### 13:00-13:20 趣旨説明

「18世紀と災厄のモーメント——歴史から見る自然災害」

佐藤 淳二 (北海道大学)

### 13:20-14:00 第1報告

「リスボン・1755年」

富永 茂樹 (京都大学)

### 14:00-14:40 第2報告

「革命の予兆—カラブリア大震災とナポリ啓蒙—」  
奥田 敬（甲南大学）

### 14:40-14:50 休憩

\*大会会場にお茶をご用意します。

### 14:50-15:30 第3報告

「二つの巨大地震と18世紀の幕開け」  
磯田道史（静岡文化芸術大学）

### 15:30-15:50 コーヒー・ブレイク（質問書回収）

### 15:50-16:50 討論

### 16:50-16:55 閉会挨拶



\*大会参加費として **500 円**（ただし学生は**無料**）、非会員の方は **1,000 円**をいただいております。ご了承ください。

\***お弁当**をご希望の方はお申し込みください。

両日とも、大学食堂は休業しており、大学周辺に飲食店はあまりございません。お弁当を申し込まれることをおすすめいたします。日曜日は、お昼休みに総会があります。

**お弁当代：1,000 円（税込、お茶付）**

\*大会参加の際、保育所、ベビーシッターを利用される場合は、学会にて保育費の半額を負担いたします。ご希望の方は、学会終了後領収書を事務局までお送りください。後日学会負担分をお振込みいたします。また、大会会場別室でお子さんをお預かりすることも可能です。その場合、シッターの派遣を予定しております。派遣依頼予定の業者は「千種シッターサービス（ホームページ：<http://www5.ocn.ne.jp/~baby110/>）」です。ご利用を希望される方は、出欠はがきにその旨を記入下さい。大会校事務担当者が個別に打ち合わせをいたします。

\*大会への出欠は同封の葉書で **5月31日（木）** までにお知らせください。



## 自由論題報告

会場 名古屋大学 経済学研究科 カンファレンスホール

### 18 世紀ロシアにおけるゲーテ受容

金沢 友緒

(東京大学大学院 人文社会系研究科)

近代ロシア文学は外国文学の受容と模倣を繰り返す中で育まれた。18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて数多くの西欧文学の翻訳や翻案が刊行され、出版物全体における比率はヨーロッパの他の文化圏に比しても大きかった。とりわけドイツはロシアにとって西欧諸国への窓口であった。ロモノーソフ、ジュコフスキー、ラジーシチェフ等、近代ロシア文学を担うことになった数多くの知的エリートがドイツの諸大学に学び、新しいスタイルについての情報を祖国にもたらした。

ドイツ文学の中でも J.W.ゲーテの名前は広く知られ、特に『若きウェルテルの悩み』(1774)の翻訳は 1780 年代に版を重ねた。しかし『ウェルテル』に先立ってロシアで最初に翻訳されたのは、コゾダヴレフ(1754-1819)による『クラヴィーゴ』(1774 露訳は 1780)であった。コゾダヴレフは政府の要人で、エカテリーナ 2 世の雑誌の共同編集者も務めた人物である。彼はライプツィヒ大学に留学した経験を持ち、ゲーテを初めとするドイツ文学に親しんでいた。自らも喜劇を手がけていた彼は、風俗劇としての『クラヴィーゴ』に深い関心を持ち、翻訳を試みたと考えられる。しかし同時に、1780 年代のロシアが古典主義からセンチメンタリズムへの移行期にあったことを考慮すると、この翻訳は個別的な事件ではなく、当時ロシアに定着していたフランス古典主義演劇からの離反の動きとして捉えることができるだろう。

『クラヴィーゴ』はゲーテの他の劇作品『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(1773)や『シュテラ』(1776)とは異なり、19 世紀に至るまで繰り返し上演された。ドイツの「シュトルム・ウント・ドラング」の精神を反映し、シェイクスピアに触発されて書かれた『ゲッツ』に比して『クラヴィーゴ』がロシアで好まれたことは、18 世紀末のロシア・センチメンタリズムとドイツの「シュトルム・ウント・ドラング」の関係の実体について認識させてくれる。

『ウェルテル』と『クラヴィーゴ』はほぼ同時期に異なった形式で創作された。この 2 作品には、作家ゲーテの類似した主題と構想を認めることが可能だろう。本発表ではロシアにおけるゲーテ受容の始まりとしての『クラヴィーゴ』の翻訳を取り上げ、当時の作家達の念頭にあった「センチメンタリズム」の内容を明らかにする。その際に『クラヴィーゴ』の翌年に翻訳された『ウェルテル』がもたらした効果も合わせて考察したい。

## 博物学の詩人 パーシー・ビッシュ・シェリー ——初期の詩を中心に

加藤 芳子  
(北海道大学大学院博士後期課程)

英国 18-19 世紀の詩人パーシー・ビッシュ・シェリーPercy Bysshe Shelley (1792-1822) は、18 世紀西欧に於いて隆盛した博物学 natural history の強い影響を受けた独特の詩人である。彼は博物学的なメタファーを、韻律の整った詩という形式の中で使用する事により、文学と科学(博物学)という、一見相反するかのような世界を噛み合わせた、ユニークな詩人なのである。ここで言う博物学というのは、植物学や地質学、氷河学、鉱物学、化学、天文学、気象学、火山学や地震学等のような諸科学を統括していた、18 世紀の博物学という学問を指す。

彼は、18 世紀に流行した picturesque という、自然の崇高な美や驚異を称賛する、いわゆる「自然詩人 nature poet」ではない。「自然詩人」にとって自然は、その美や崇高さが描写されるべき対象である。しかしながら、「博物学の詩人 naturalist poet」にとり自然は、自然界に潜む真理を例証するための手段なのであって、彼の描く対象はあくまでも自然界の真理なのである。彼は自然界の真理を、可能な限り科学的に叙述しようとして、自然界のメカニズムを表すようなメタファーを駆使する。そういう訳で彼のメタファーは、宇宙にあまねく普遍のメカニズムを解明する天文学に基づいたものである事もある。また、彼が夕焼けを描く時には、その現象を博物学者として観察し、この場合は気象学に基づいて、可能な限り科学的に、夕焼けの形成過程を報告しているのである。シェリーは、自然を「博物学者 naturalist」(つまり博物学の学者)として、観察・報告しており、自然を観察し、自然界に潜む真理について報告しているという意味に於いて、naturalist poet なのである。博物学者が、事実に基づいて科学的に(特に数学的に)自然界について報告するのと同様に、シェリーは、宇宙や人間の社会や歴史を含めた自然というものを、博物学のメタファーや、詩という韻律の整った(つまり数学的な手段を使って)、描写したのである。Naturalist poet としてのシェリーが、雷鳴、電光、冬の霜、嵐、疫病、季節などのような自然現象を、自然の猛威即ち彼の言う「必然」Necessity のメタファーとして多用したのは、当然の事だったと言える。

本論では、シェリーの初期の詩、「クイーン・マブ」や「モン・ブラン」等を中心に、彼の naturalist poet としての特徴を提示したい。

## 趣味の調停者としての理想的モデル —ディドロの模倣論とその批評的意図—

吉成 優  
(東京大学大学院)

百科全書派の主幹ディドロ (Denis Diderot, 1713-84) は、哲学者としてのみならず、美術批評、演劇論の分野でも多くの著作を残したことで知られているが、『百科全書』編纂の作業に追われていた 50 年代においては作家としても批評家としても寡作であった。そのため、50 年代以前の著作をもとに 60 年代以降の美学理論、美術批評の成立を跡づける作業は研究史の中でも主要な論点のひとつを成してきた。本発表で取り上げるディドロの「理想的モデル *modèle idéal*」説も、1767 年の展覧会評『サロン』の序文の中で初めて美術論として主題的に論じられることになるが、50 年代以前の著作の中でも散発的に言及されているため、その成立史は同じ問題系の中に位置している。

本発表では、1758 年の『劇詩論』の最終章「作家と批評家」を足がかりに、67 年の『サロン』序文における「理想的モデル」説の抽象性、観念性、そしてしばしば指摘されてきた具体例の欠如という性格の内に、寧ろ多様な趣味の調停という積極的な意図が見出されることを明らかにする。

(1) 60 年代以降の「理想的モデル」説は制作のためのモデルが現実の世界に存在し得ないことを説いているが、58 年の『劇詩論』においては、制作論としてよりも寧ろ個々人の多様な価値観を調停するために、人間「一般」の完全体としての「理想的モデル」の構想が試みられていた。(2) しかし『劇詩論』の後続する箇所では、モデルを構想する主体もまた個人という限界を逃れられないという理由で「一般的」モデルの構想が断念され、かわって個々の境遇や職業ごとの「特殊な」理想的モデルの形成が追求されるようになる。(3) 後に、67 年の『サロン』序文において改めて構想される「一般的な」理想的モデルの理論は、「特殊な」理想的モデル構築の必要性を説く同時期の他のテキストと比べてはるかに抽象的、観念的であるが、寧ろこの観念的性格のために、かえって特定の時代や藝術家個人の作品に還元されない極点として「理想的モデル」を位置づける可能性を拓いている。我々はここに、58 年の『劇詩論』最終章において当初企図されていた調停的な意図の反映を読み取ることができる。この点で、67 年のディドロは制作論として「理想的モデル」を論じながらも、美術における新旧論争の調停者たらんとする自らの批評的立場を開示している。

## 18世紀フランスにおける「白いモスリンのギリシア風ローブ」の表象 —マリ・サレの舞台衣裳改革の試み—

林 精子  
(青山学院大学)

マリ・サレ (Marie Sallé 1707-1756) は、18世紀前半にパリ・オペラ座で活躍した教養豊かなダンサーであり、啓蒙思想を代表するヴォルテールらから賞賛された女性振り付け家のパイオニアでもあった。当時のヘンデルやラモールの音楽にインスピレーションを与えたとされており、晩年はルイ15世の宮廷の舞台で踊った。サレの優雅な舞踊は、当時から現代に至るまで高く評価されている。

しかしながら、サレが「白いモスリンのギリシア風衣裳」を着装して試みた舞台衣裳改革は同時代には容易に受け入れられず、今日に至るまで詳しく論じたものはない。したがって本発表では、モードやモスリンの社会的背景等も視野に入れながら、サレの舞台衣裳改革の意義を問い直したい。

当時はオペラ座の舞台衣裳デザイナーであったボケのデッサンが示すように、時代背景や登場人物の配役に関わらず、重厚で装飾華美な宮廷衣裳風の舞台衣裳が通常着装されていた。その慣習に反して、サレは1734年にロンドンでギリシア神話を題材とした《ピグマリオン》の舞台でギリシア彫像を演じた際に伝統的な宮廷風舞台衣裳ではなく、ドレープで身体にフィットさせた「白いモスリンのギリシア風衣裳」で踊ったのである。当時宮廷で着装が義務づけられていたパニエや胴着を着けずに、髪も肩まで自然におろしたサレの舞台がセンセーションを巻き起こしたことを同年の『メルキュール・ド・フランス』が伝えている。マルモンテルは『百科全書』(1751-1772)で、またディドロは『演劇論』(1756)で、ノヴェールは『舞踏への手紙』(1760)で物語の歴史的社会的な真実味に欠ける当時の不自然な宮廷風舞台衣裳への批判を展開したが、サレは彼らに数十年先駆けて舞台衣裳改革をすでに試みたのである。

このように18世紀中葉からの舞台衣裳改革を牽引したと考えられるサレの斬新な「白いモスリンのローブ」はモードにおいても先駆的であったと考えられ、18世紀中葉の絢爛豪華な宮廷社会でモードを牽引していたポンパドゥール夫人の快適な優雅さへの嗜好に影響を与えた可能性がある。また、新古典主義へ向かう時代のなかでルソーが描いた「優美な簡素さ」を備えた服飾観、及び革命後に本格的な流行を迎えたダヴィッド画《レカミエ夫人》に見られるような「白いモスリンのギリシア風ローブ」を予感させるものであったと思われる。さらに東方貿易がもたらしたモスリンに関する史料や近年のサレ研究を通して、サレのこの舞台衣裳が、英仏両国間の異なる社会状況やアンシャン・レジームにおけるフランスの多様な側面を表象していたことを明らかにしたい。

## ドレスデン宮廷楽長時代の J. A. ハッセ——宮廷楽長とオペラ作曲家——

大河内文恵

(東京芸術大学音楽研究センター・大学史史料室)

ハッセ (Johann Adolf Hasse 1699-1783) は、1730 年代初頭から 1763 年までドレスデンの宮廷楽長をつとめたが、彼のもう 1 つの肩書きであるイタリアでのオペラ作曲家としての最初の頂点も 1730 年代から 40 年代であり、時期を同じくしている。このような離れ業が可能となった理由の 1 つに、ザクセン選帝侯がもう 1 つの所領ポーランド王国に滞在している期間にはドレスデンを離れることが許されたことがあったのは言うまでもないが、本当にそれだけだろうか？

宮廷楽長時代のハッセのオペラ創作をみると、ザクセン選帝侯国およびポーランド王国国内での上演と国外での上演との偏在の仕方によって大きく 4 つの時期に分割できる。第 1 期 (1730 年～1736 年) : 主にイタリアでオペラ初演が毎年 1～4 作品おこなわれており、ドレスデンではハッセが宮廷楽長となる決定打となった《クレオーフィデ》のみである。第 2 期 (1737 年～1741 年) : ドレスデンで初演されたオペラ 6 作品はすべて、宮廷詩人パツラヴィチーノ (1672-1742) の詩に曲付けされたものである。6 作品はこの 5 年間に集中して作曲されていると同時に、同時期には他の詩人によるオペラは過去に初演されたオペラを改訂したもの以外は上演されなかったという二重の意味で特異である。

第 3 期 (1742 年～1755 年) : ほぼ毎年のようにドレスデンで新作オペラが初演されているが、それらの多くはゼーノやメタスタージオといった当代の人気オペラ作家によるもので、パツラヴィチーノの後継者パスキエーニによるものはごく一部である。第 4 期 (1756 年以降) : 七年戦争によって選帝侯がポーランドに逃亡してしまったため、ドレスデンでの新作オペラの上演はない。

オペラ作曲家と宮廷楽長との両立の秘密を握る鍵の 1 つは、パツラヴィチーノの詩による 6 作品にある。これらはザクセン選帝侯国および選帝侯が王位を兼ねていたポーランド王国両国内以外で再演された形跡がないという他のオペラにはみられない特性を持つからである。つまり、宮廷が対面を保つための国家的プロジェクトとしてのオペラであって、元来宮廷の外では通用しない旧来型のオペラだったと考えることができる。これら 6 作品が他のオペラとどのように異なるかを探ることによって、宮廷オペラの転換と宮廷楽長の職務との関係について明らかにしたい。

## 近世・近代ドイツの聖書解釈学における「著者の意図」の契機 聖書の意味の分類法の歴史的変遷にそくして

桑原 俊介  
(東京大学)

本発表は、17世紀中葉から19世紀冒頭にいたる聖書解釈学における「著者の意図」の契機の歴史的展開を、聖書の *sensus* の分類法に即して概観する試みである。

周知の通り、中世以降のカトリックにおいては、聖書の「四つの意味」(*sensus litteralis, allegoricus, moralis, anagogicus*) が公認されてきた。それに対してプロテスタントは、聖書の寓意的・神秘的意味を排し、聖書の意味を *sensus litteralis* (字義的意味) に限定する。この *sensus litteralis* は、*sensus litterae, grammaticus, historicus* など、様々な名称で呼ばれてきたが、解釈学の名付け親でもある Dannhauer (1603-66) は、それをさらに、聖書で「語られたこと」(=テキストの字義通りの意味) としての *sensus litterae* と、聖書で「意図されたこと」(=著者が意図した隠れた意味) としての *sensus litteralis* とに下位区分する。Dannhauer は、かかる二分法の適用を、隠れた意図がある箇所のみ限定したが、Baumgarten (兄 1706-57) や Meier (1718-77) は、かかる二分法を一般化し、前者の *sensus litterae* を、或る語がとり得る多義的な意味の全体、後者の *sensus litteralis* を、かかる *sensus litterae* の中でも、著者の意図に適合した意味として再定義する。

これにより、著者の意図という契機が、聖書解釈学の中でも重要な一契機として確保されることになるが、それに対して Ernesti (1707-81) は、*sensus litterae* と *sensus litteralis* との区別を排し、聖書の意味はすべて、*sensus grammaticus=historicus* という、著者が生きた時代の一般的な言語使用 (*usus loquendi*) に即して一義的に決定され得るとする。ここでは、個別적인著者の意図が、一般的な言語使用の背後に後退するが、ここで *sensus historicus* という概念が復活することで、かえって、著者の意図の歴史的契機が聖書解釈の中で比重を増すことになる。というのも、Baumgarten が、英国における聖書の詳細な歴史研究をドイツに紹介したのを承けて、Ernesti が、詳細な歴史研究に基づく聖書の意味を *sensus historicus* という概念の下で実証的に提示したことにより、彼に続く Semler, Keil, Wolf 等が、著者の意図に即した意味を *sensus historicus* として歴史的に研究するようになっていったからである。

例えば Wolf (1859/8- 1824) は、Ernesti によって廃棄された *sensus* の二分法を、*sensus grammaticus (=litteralis)* と *sensus historicus* という形であらたに復活させ、前者を、文法や論理学に即した一般的な意味、後者を、歴史的状況に即した著者の意図に基づく個別的な意味として再定義する。さらに Bretschneider (1776-1848) は、かかる二分法を、「言語使用」それ自体の一般性と個別性とに基づいて再定義するが、このような *sensus grammaticus* と *sensus historicus* との区別が、Schleiermacher の解釈学における *grammatische Interpretation* と *psychologische Interpretation* との二分法に結びつき、個体 (*Individuum*) としての著者の意図の歴史的な追構成 (*Nachkonstruktion*) という、ロマン主義的な解釈方法の学問的な定立に結実してゆくことになる。

## フィジオクラットの政治理論の矛盾？ ——「デスポティズム」と「自由な討論」をめぐる

安藤裕介  
(立教大学)

1767年以降、フィジオクラット(重農主義者)の間で農業に関する議論はほとんど影を潜め、代わりに理想の統治形態をめぐる議論に多くの紙幅が割かれるようになる。ケネー『中国の専制政治』の続編的性格をもつ、ル・メルシエ・ド・ラ・リヴィエールの『政治社会の自然的本質的秩序』はまさにそのような方向で上梓された。後の研究者ウレルスは、このラ・リヴィエールの作品こそが「現在われわれが« *physiocratique* »と呼びうる教義の正真正銘かつ公然たる表明」であったと評しているほどである。ラ・リヴィエールは、ケネーが理想の経済秩序——穀物取引の完全なる自由化——との関係で唱えた「正統な専制政治」の観念をさらに詳細に発展させ、「合法的専制 (*despotisme légal*)」という名でこれを理論化した。このとき、政治権力は経済秩序との関係のみならず、「世論 (*opinion publique*)」という新しい公共表象との関係で語られ始める。ハーバーマスによるフィジオクラットへの評価、すなわち「政治的に議論する公衆」の発見は、まさにラ・リヴィエールの「世論」観の新しさと対応していた。

他方でマブリは、『政治社会の自然的本質的秩序に関してフィロゾーフ・エコノミストに呈された疑念』のなかで、彼らの「合法的専制」や「明証性」の観念を批判し、社会における「意見」の多様性と「自由な討論」の意義を説いた。しかしながら、こうしたマブリの批判にもかかわらず、ラ・リヴィエールは「この世の女王」として「意見」が社会の隅々に君臨していることを認め、様々に混交する「意見」の坩堝から「明証性」をもった知識を引き出す手続きを重視していた。たしかにラ・リヴィエールは「明証性」を獲得した一元的で強力な主権者による統治＝「合法的専制」を理想化した。しかし、同時に彼は「明証性」が確定するためには人々の間で「意見の衝突」や「意見の戦い」が必要であるとも訴えていたのである。ラ・リヴィエールの思想に現れた、この「デスポティズム」と「自由な討論」の関係をどのように理解すればいいのだろうか。この二つの観念が同居することは、理論的に致命的な矛盾を生まないのだろうか。

本報告では、フィジオクラットの思想的絶頂期に発表されていながら国内外の研究史でほとんど注目されてこなかったラ・リヴィエールの著作を取り上げ、その言説構造を分析することによって上記の問いに答えることを目指す。

共通論題 「18世紀と自然災害 —リスボン・ナポリ・日本」

会場 名古屋大学 経済学研究科 カンファレンスホール

18世紀と災厄のモーメント——歴史から見る自然災害

(趣旨説明)

佐藤 淳二

(北海道大学)

寺田寅彦『天災と国防』(講談社学術文庫)は、東日本大震災と原発事故後の状況の中、現在まで多くの版を重ねている。寅彦は、1933年の三陸での津波被害について、人間の記憶の残存期間がせいぜい三十年と短いこと、これに対して自然は極めて正確に、非常に長い周期で同じ事を反復すること、結果として被害は深刻化甚大化すると分析している。「紀元前二十世紀にあったことが紀元二十世紀にも全く同じように行われるのである。科学の方則とは畢竟〈自然の記憶の覚え書き〉である。自然ほど伝統に忠実なものはないのである」(寺田寅彦『天災と国防』)。だから、自然科学者としての寺田寅彦の目には、天災を教訓として、その被害を減らす努力を積み重ねることこそ人類の歴史と映るのである。といて、自然を支配し組み伏せようなどという科学観の破綻は、もはや明らかでしかない(原発事故はその最大の象徴である)。つまり、われわれは、2011年3月から始まった未曾有の災害によって、文明の新しいあり方、別の自然観をいよいよ構想しなければならない試練に遭遇しているのである。運命の偶然からもたらされた破局、ないし偶発的緊急事態の到来、それは、確かに災厄ではあるが、また同時に、それまでの自らの力量を乗り越えて運命に立ち向かう契機でもある。新しい理解や行動を迫る挑戦の瞬間(モーメント)、均衡が破れて以前の状態にはもはや戻れない転回点(モーメント)とは、そのようなものではないだろうか。まさに、「ありとあらゆる危険が前途に立ちはだかってくるため、力量によってつぎつぎに乗り越えねばならない」(マキャヴェリ)のが、現時点の特徴であろう。

十八世紀においても同様のモーメントが存在していたと考えられる。だから、先人の事例から多くを学ぶべきなのである。本大会の共通論題として、ヴォルテールとルソーの論争という奥行きもある1755年のリスボン大地震について富永茂樹(京都大学)、また、カラブリア大震災と関連してのナポリ啓蒙の考察を奥田敬(甲南大学)、そして東海地方をはじめ各地に甚大な被害を出した1707年の宝永地震と津波という深刻で切実な話題をめぐって磯田道史(静岡県立静岡文化芸術大学)の各氏に、それぞれ考察をお願いした。このシンポジウムが、東西の十八世紀の貴重な教訓を現在と未来に活かす縁となることを願ってやまない。



## 第1報告

### リスボン・1755年

富永 茂樹

(京都大学 人文科学研究所)

近代の誕生の日付のひとつ、と J. シュクラールのいう (*The Faces of Injustice*, 1990) リスボン地震は、1755年11月1日の朝に発生した。この日は万聖節で各地の教会のミサに集まっていた多数の信者が瓦礫の下敷きとなって命を失った。またその直後に津波(タージュ川の増水)と大火災が生じて、そのため死者はさらにふえる。当時8万人が亡くなったとする説もあったが、これはむしろひとが震災から受けた衝撃の強さを示すものとどまり、実際には約1万人程度であったとされる。それでも18世紀半ばのこの都市の人口は25万人であったので、4パーセントすなわち25人に一人の犠牲者が出たことになる。20世紀になってからの研究によれば、震源地は北緯38度西経10度の海底、つまり大西洋のプレートの衝突によるものであり、規模は推定マグニチュード8ないし9であった。

リスボンの災禍については早くからさまざまな分野で反応があったが、とりわけよく知られているのは、翌年になってヴォルテールが「リスボンの災禍についての詩—あるいは『すべては善である』という格言の検討」を發表し、ライプニッツやポープのオプティミスムへの疑念を呈し、これにたいしてすぐさまルソーが「ヴォルテール氏への手紙」でもって反論したことである。後者にはまさに震災の年に出た『人間不平等起源論』につながる議論を見ることができ、ヴォルテールは「詩」と同じ56年に『習俗試論』を出し、さらに『カンディード』の主人公にリスボンの地震を経験させることからしても、リスボン地震は啓蒙哲学のひとつの転回点と大きく重なるものとなった。

地震による津波はドーヴァーからデンマークの海岸にまでおよんだが、ケニクスベルクにあって自然哲学を中心に仕事をはじめていたカントは、翌年に「地震の歴史と博物誌」をはじめとする3本の論文を書き、これらの一部分はヴォルテールと合流し、オプティミスム、さらには神義論の検討へとつづいてゆく(「オプティミスム詩論」1759年ほか)。またリスボンへの直接の言及は見られないものの、『判断力批判』(1790年)で荒れた海とともに地震のイメージが登場することはいわゆる「崇高の美学」の形成との関係で、われわれにある種の想像を可能にする。なお『美と崇高の観念の起源』(1759年)のバークが、これはリスボンではなくロンドンのものであるが、大火災(1666年)と地震(1750年)にふれていることも興味深い。

ポルトガルの首都に戻ると、こちらでは震災後の都市の復興の指揮を執ったポンバル侯爵に注意することができるであろう。災害の廃墟を前にして茫然自失するばかりの国王ジャン1世にたいして、「陛下、まずは死者を埋葬し、生存者の世話をせねばなりません」と答えたというのは、のちに作られた話にすぎないらしいが、この言葉は侯爵の合理主義を示すものではあり、この合理主義にもとづいて作られ、J.-A. フラサが「啓蒙の都市」と呼ぶ (*Une ville des Lumières. La Lisbonne de Pombal*, 1965) では、18世紀の都市計画、建築術、美学が実践されることになる。また他方で、ポンバルの諸政策からは啓蒙と権力との関係、つまりふつうは「啓蒙専制君主」の概念をとおして議論がなされてきたことからの、別のヴァージョンを見ることが出来るであろう。

## 第2報告

### 革命の予兆—カラブリア大震災とナポリ啓蒙—

奥田 敬  
(甲南大学)

1783年2月5日に半島最南端部の南カラブリア地方を襲った地震(推定規模 M6.9)は、イタリア史上最大級の甚大な被害をもたらした。同地方の総人口 44 万人の 1 割前後の命が奪われ、384 あった集落の半ば近い 182 が全壊し、うち 33 は全面移転を余儀なくされた。被害総額は 3125 万ドゥカートに達し、当時のナポリ王国の歳入の 2 倍を上回った。

前年に創設された「財政最高評議会」に結集する啓蒙知識人たちの提言により、中央政府は「教会財産管理公団(Cassa Sacra)」を設立し、同地方の修道院領の没収・売却をつうじて復興資金の調達に加えて独立自営農民層の創出をも図ったが、売り出された 5 万 ha のうち買手が付いたのは 1/4 に過ぎず、売却総額も 155 万ドゥカートに留まった。土地を購入できたのは領主層・都市貴族層と少数の富裕な農民層に限られ、集約的な果樹栽培を営む農業ブルジョワジーの生成を促したが、農民大衆の怨嗟を招いた。

《地震以後、カラブリア人の心中では大転回(rivoluzione)が感じられている》—1792年に特命の「王国巡察官」として現地調査に赴いたジュゼッペ・マリーア・ガランティ(1743-1806)は、こんな観察を日誌に記している。復興のためにガランティが新たに献策したのは、社会経済的実情に即した(2世紀後に実現する)地方行政区画の改編と、王権の主導下に地方知識人をテクノクラートの名望家として統合する機構「郷土会(Società patriottiche)」の整備とであったが、後者はフリーメーソンの浸透とフランス革命の影響によって急進的な「愛国者協会」へと変成していく。

フランチェスコ・マリオ・パガーノ(1748-99)もまた 1783年に刊行した『諸社会の起源・発達・衰退に関する政治論集』初版の序文で、黙示録的な情景を一挙に現出させた大震災の直後に《生来の平等の感情が哀れな農夫たちの胸に湧き上がった》と指摘し、富者や有力者たちの驕慢を戒めていた。著名な刑法学者として 1794年の「ジャコバン派の陰謀事件」の被告たちの弁護に挺身したパガーノは、やがて自らも投獄・追放され、1799年ナポリ革命で帰国し臨時政府の立法委員長として封建制廃止と憲法案の起草にあたるが、「サンフェディスタ」反革命農民軍の猛攻によって僅か半年で潰えた共和国と運命をともにした。

激変した大地と挫折した革命—辛くも生き延びたガランティが回想するとおり、《1783年の地震は、この繁栄も終わらねばならぬと自然が我々に警告したかのよう》であった。

## 第3報告

### 二つの巨大地震と18世紀の幕開け

磯田 道史  
(静岡文化芸術大学)

日本の18世紀は、二つの巨大地震で幕を開けたといっている。1703年の元禄関東地震と1707年の宝永地震である。

元禄関東地震は、小田原を壊滅させ江戸に大被害をもたらし、その津波は鎌倉や房総を襲って、遠く東海地方の新居宿を洗い流し、紀伊半島にまで達した。この大地震によって「元禄」は終わりをつげた。京都に被害のない東国の地震津波被害によって改元がなされたことは、ようやく、この18世紀から日本国が地震被災において東西一体となってきたことを示している。4年後、南海トラフが連動した超巨大地震が発生した。宝永地震である。大坂まで襲ったこの地震の津波の巨大さは言語に絶する。この津波の恐怖によって鈍化しつつあった17世紀の干拓による低湿地の大開発時代は終わりにむかう。日本史においては、二つの地震が17世紀と18世紀を画している。

日本史において18世紀は「記録の世紀」といわれる。あらゆる現象が精密に記録されはじめた時代であり、1498年の明応地震は宝永地震よりも巨大であったと考えられるが記録がいたって少ない。その意味で、宝永地震は人類がはじめて精密に記録した超巨大地震であるといえるかもしれない。

本報告では、18世紀初頭の二つの巨大地震の「揺れの特徴」を18世紀人がどのように記録したかを示したい。具体的には、解読が難しい鹿島神宮の大宮司家文書などから、報告者が発見した新出の歴史地震史料などから、18世紀人の地震記述の問題を論じる。

17世紀に完成された地震記録文学としての浅井了意「かなめいし」(1662年、寛文京都地震に取材)が登場する。しかし、まだこの段階では、科学的客観性をもった揺れの記述とはいえない。時間単位に分も秒もなく、近代的震度計もなかったからである。しかし、18世紀初頭の二つの巨大地震から、日本人は、客観的な震動時間の記述をはじめた。近衛基熙の日記「基熙公記」あたりから地震についてのある種の客観性・科学性をもった記述がみられはじめるが、このことについても論じたい。

揺れについての史料の記述が詳しければ、例えば、複数の地震の揺れの特徴を自分の経験に基づいて比較したり「大地震二度」などと記述されていれば、われわれはその地震を引き起こした地盤の割れかたについて貴重な情報が得られる。

18世紀あたりから日本人は、彼らなりの客観性をもって地震を記録しようとしはじめた。18世紀人のこの科学性のおかげで、われわれは、元禄関東地震は3分間、宝永地震では10分間の揺れであったことを知ることができるのであり、18世紀人がのこした遺産と警告は、はかりしれない重みをもって、われわれの前に存在している。

2012年4月 発行

日本18世紀学会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
京都大学文学部 増田（仏文）研究室

Tel. / Fax. 075-753-2766

[jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp](mailto:jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp)